

若年性がん患者が作る！若年性がん患者のための情報マガジン

# STAND UP!!

# 06

2015.SPRING

～がん患者には「夢」がある～

私たちのライフワーク

がんになったからこそ見つけた  
“目標”と“生きがい”

がんと闘う仲間たち

結婚した若年性がん患者が語る本音  
～A round-table talk about family～

Special Interview

タレント 友寄 蓮

みなさんと共に私もがんばっていきたい。  
共に生きたい。

若年性がんと向き合う10人のストーリー

# STAND UP!!

06

2015.SPRING



## CONTENTS

- 03 巻頭スペシャルインタビュー  
「みなさんと共に私もがんばっていきたい。共に生きたい。」  
タレント 友寄 蓮さん
- 06 若年性がんと向き合う10人のストーリー
- 17 漫画「ひらめいた♪」
- 18 がんと闘う仲間たち
- 20 より良い闘病生活のために  
『アピアランス支援センター』を利用しよう！
- 22 私たちのライフワーク  
がんになったからこそ見つけた“目標”と“生きがい”
- 26 結婚した若年性がん患者が語る本音 ~A round-table talk about family~
- 28 メンバー 一同からあなたへ・・・
- 29 STAND UP!! 活動報告
- 30 編集後記
- 31 認定NPO法人ゴールドリボン・ネットワークの取り組みについて

発行元

若年性がん患者団体  
STAND UP!!

STAFF

Editor in Chief / 中陳香織  
Assistant editor / 水橋朱音  
Editor / 松井基浩 鈴木美穂 白井裕美子 亀山隼人  
Writer / 堀川宏太 川原ナツミ 岸田徹 櫻井はるか 中島千尋  
体験談の10人 がんと闘う仲間たちの6人 ライフワークの10人  
Designer / さちこちdesign

表紙

Photographer / 小坂仁都美  
Model / STAND UP!! メンバー



みなさんと共に  
私もがんばつていきたい。  
共に生きたい。

Special Interview

## タレント 友寄 蓮さん さん (20)

取材・文・写真／中陳香織、堀川宏太、鈴木美穂  
協力／水橋朱音

「今はとにかく何をしても楽しいんです！」  
そう話す友寄蓮さん(20)は、数か月前まで抗がん剤治療をしていたとは思えないほど生命力にあふれていました。高校2年生の時に急性リンパ性白血病を発病し、高校卒業と同じころに退院、それから約半年で芸能界デビューに至った友寄さん。現在は、タレントや女優として活躍しています。  
しっかりしていて、話すだけでパワーを与えてくれるような友寄さんですが、がんになる前はごく普通の高校生だったといいます。治療中のように過ごし、そこからどのような思いで芸能界に飛び込んだのでしょうか？そして今、どんな夢を描いているのでしょうか？

がんになったとき

「**がんだと分かった経緯を教えてください。**」

高校2年生のとき、鼻血がずっと止まらないうちに、すぐにあざができてしまうといった症状が出始めました。周りの人とは冗談で「白血病じゃないの」って話してたんですけど、本当にそうだとは思いませんでした。そのうち症状がだんだんひどくなって、病院で検査を受けました。そして「これは血液の病気かもしれない」と告げられ、その瞬間に『これは白血病かな』と思う気持ちがありました。自分が白血病だということは最後まで受け入れられなかつたんですが、当時はあまりにも体調が悪くて、『やっぱりこれは病気だったんだ』という安心感もありましたね。

―治療中はどのように過ごしましたか？

先生や看護師さん、そして両親に支えられてなんとかやっていきましたが、最初は、『私はいつ死ぬんだろう』とばかり考えていました。抗がん剤の副作用が本当にひどくて、帯状疱疹が出たり、抗がん剤を使うたびに40度の熱が出たりして、治療はなかなか進まなかったです。高校生という多感な時期だったので、髪が抜ける、顔がむくんでまんまるになってしまったといった副作用もすごく嫌でした。

友だちから応援の言葉ももらっても素直に受け取れず、『あなたには楽しい時間があるでしょ、私には少しもないのに』なんて思ってしまった。『自分だけが常につらい思いをしている。孤独だな』と感じていましたね。

―高校の勉強はどうしていましたか？

体調が良い時に何回か登校したことはありましたが、ほとんど一人で勉強していました。卒業は、提示された課題をこなすことで認めてもらえました。でも、やはり勉強にはついていけず進学は難しかったです。留年も提案されましたが、髪が抜けて、むくんだムーンフェイスのまま知らない子たちと一緒に生活することが考えられなくて、そのまま卒業してしまいました。

―退院した後はどのような気持ちでしたか？

退院したのは、ちょうど高校を卒業したころ、3月の下旬でした。卒業式は出られなくて、校長先生と担任の先生と3人で行いました。

『退院して外の世界に戻って来られたのはいいけど、いったい何をすればいいんだ



友寄 蓮 (ともよせ れん)

1995年3月29日生まれ。東京都出身。高校2年生の時に急性リンパ性白血病と診断。高校卒業時に退院。2013年8月オフィス彩に所属し、芸能活動を始める。2014年5月、抗がん剤治療終了。現在、月に一度の検診で経過観察中。

【主な経歴】

日テレジェニック2014 ファイナリスト  
『進研ゼミ』スチール、『コカ・コーラ』CM。TBS『MOZU-episode1-百舌の叫ぶ夜』室井凜 役  
舞台『LOVE どきゅ〜ん15』、舞台『友情〜秋桜のバラード〜』鈴木幸子 役

ろう』と感じていました。私の中では、発病した高校2年生の時のまま時間が止まっていたので、いきなり社会に出てもまどつてしまっんです。周りの友だちは大学に進学したり、結婚する子もいたりして、自分がそいつう年齢になっているんだと感じました。でも、気持ちは高校2年生のままなので、なかなかついていけませんでしたね。

―その後、どのような変化がありましたか？

『とにかく何かしなきゃ』と思って、まず手当たり次第アルバイトの面接を受けました。でも、『退院直後でまだ抗がん剤を使っています』と伝えると、『体調に責任を持ってないのでごめんなさい』という返事が多かったんです。そんな中、あるイタリアンレストランで雇ってもらえましたが、体力的に全然ついていけなくて。コーヒーカーップひとつすら重たいんです。結局1日だけ働いて、『やめさせてください』

ということになりました。

健康な人が当たり前前にできていることが自分にはできないということを実感して、不安になりましたね。やっぱり『自分は病気を引きずっている』と思いつちんだりしました。

芸能界デビューのきっかけ

―そこから芸能界に挑戦しようと思ったのはどうですか？

もともとお芝居が好きで、発病前から劇団に通い、退院直後から復帰はしていました。でも、顔がパンパンでウィッグをかぶっていた自分と他の子を比べてしまったり、病氣のことを言い出せなかったりしました。そして人の目が怖くなってやめたい、もう自分は人前に立つことはできないと諦めていました。でも、アルバイトもできない私に何ができるか考えた

時、同じように社会復帰で苦しんでいる患者さんたちのために、発信者になりたいと思っただけです。特に芸能者になりたいというわけではなかったんですが、そういうことを伝えていくには芸能界が一番だと思って、今の事務所に応募しました。杉本彩さんが動物愛護の活動をしていることを知って、この事務所なら私がやりたいことをやらせてくれるんじゃないかと思っただけです。

―どうしてそこまで気持ちが変わったんですか？

自分でもうまく言えないんですけど、『やっぱり何かしなきゃ』という焦りは消えなくて、どんどん追い詰められていた果てに、『勢いで事務所への応募を決めていました。病院やネットを通して、私と同じように社会復帰で苦しんでいる患者さんたくさんいることは知っていました。そして、『がんを経験して社会に戻るこのつらさは、体験した私なら伝え



られる！』そう思ったんです。とにかく、自分の生きがいを見つけたい一心で飛び込んだ世界でした。

「飛び込んだ芸能界という世界はどうですか？」

『ようやく自分の居場所を見つけた』という感じがして、それがいちばんのパワーになっています。病気になる前は考え方も暗くて今とは全然違っていたんですよ(笑)。でも、私にしかできない活動をしたり、応援してくれるみなさんが集まってくでさることで、『あ、わたしの居場所はここなんだ』と思えたんです。

今は、全力で仕事をして楽しむことで、病気で失った時間を取り戻している感じ

がするんです。2014年9月から全国を回る舞台に出演したのですが、同じ年代の子がたくさんいるので、行けなかった修学旅行みたいだなと感じたり。仕事が本当に好きでやっているの、自分で枠を決めずになんでも挑戦していきたいです！

「がんのことを公表したときの反応はどうでしたか？」

去年1月に、新聞記事ではじめて病気を告白しました。それまではずっと隠して活動していたんです。やっぱり病気のことを知られてしまうと周りから気を遣われてしまうし、病気を押し出すのではなく、私自身を見てほしいと思っていました。でも病気を公表してみると、

勇気ももらいましたというメッセージが毎日のようにたくさん届いて、『病気のことを話すのは悪いことじゃないんだ』と感じました。それから、積極的に話すことで、誰かの力に、希望になるかもしれないと思って活動しています。これからは、私の姿を通して、がんで苦しんでいる方に『生きていれば可能性はいくらでもある』ということ伝えていきたいです。

夢に向かって

「これからの夢は何ですか？」

漠然としているんですが、『幸せになりたい』というのが今の夢です。今でも十分幸せですけどね。それでも、ずっとこの仕事を続けられたらそれが一番だと思っています。それに、普通に好きな人と結婚したい、家庭を持ちたいといった女性としての幸せにも憧れます。

それと、これは事務所に所属する前から考えていたことなんですが、がん患者のためのボランティア団体を設立したいです。治療中、小児病棟と一緒にた子はウィッグを無償で提供されていたのに、わたしは年齢制限でその支援を受けられないということがありました。そうした、今のボランティアでの限界の先を行く活動ができたと思います。そのような自分のやりたいことができる環境を作るには、お金や人脈も必要だろうし、何より私自身の知名度を上げて、自分で団体を引っ張っていかねばなりません。そのためにも、目標をもって仕事をしていきたいです。

がん患者のみなさんへ

「若年性がん患者のみなさんにメッセージをお願いします」

「共に生きましよう」ですね。

がんでつらい思いをして、十分がんばっている人に、簡単に「大丈夫」だとか「がんばって」とは言えません。ただ、何かあれば寄り添うし、私も一緒にがんばる。だから、「全力で一緒に生きてみよう」と言いたいです。私たちは病気になるまでつらい経験をした分、健康な人には分からないことも分かり合えると思います。お互いにつらいこと、悲しいこと、悩んでいることを共有し、寄り添って生きていけるはずですよ。だから、みなさんと共に私もがんばっていききたい。共に生きていきたい。



取材を終えて「STAND UP!!」編集メンバーと。

# 若年性がんと向き合う 10人のストーリー

若年性がんを経験した10人が、発病から治療、再発、受験、就職、夢、  
がんと向き合うことについて語った物語。  
一人ひとり生き方は違うけれど、  
10人全員が今この時を全力で生きている。



藤崎 里実  
滑膜肉腫



有川 雅俊  
胃がん



原木 櫻  
乳がん



内山 友希  
悪性リンパ腫



大野 舞子  
乳がん



越澤 亮太  
悪性リンパ腫



鈴木 綾子  
胚細胞腫(脳腫瘍)



眞部賢太  
精巣腫瘍



大倉 理恵  
急性骨髄性白血病



柿本 聡  
大腸がん 直腸肛門がん



No.01

藤崎 里実

(23歳/罹患年齢:20歳)

大学生

滑膜肉腫

## まわりの人に感謝!

「悪性の腫瘍です」先生のその一言に、初めは何が何だかよく分かりませんでした。21歳の誕生日を迎える直前、その年の夏ごろから背中にごぶができて痛みも感じていたので、地元の病院にかかり、その後がん専門病院で検査を重ねました。言われるままに入院して生検とポートを入れる手術を受けましたが、それから1回目の抗がん剤治療までの期間は、さまざまなことが頭をめぐりました。「私はこれから1年間も入院するの

か」「大学生生活は?」「私の21歳は治療で終わるということ?」「だんだんと日がたつにつれ「悪性の腫瘍」の意味が分かってきました。しかし自分ががんだと実感したのはその3週間後、髪の毛が一気に抜け出したときです。まるでドラマのようにこんなことが実際にあるのだと、そのとき初めて抗がん剤治療をしていること、私はがんになったのだということを実感し、一気に涙があふれました。「全

10回の抗がん剤治療、4月に摘出手術をするからね」と先生に言われていた私は、先が見えませんでした。つらい副作用、周りの家族や友だちに心配をかけていること、気持ちと体力の限界など、今まで味わったことのない経験ばかりでした。「何で私が……」と何度も思いました。体が弱かったわけでもなく、風邪もめったにひかず、手術はもちろんです、入院すらしたことはありませんでした。ただひたすら「治る」ということだけを信じ、治療に向き合い続けました。

治療中も、終わってからも、そして現在も悩みは尽きません。しかし、がんになってよかったことがたくさんあります。私は通っていた大学を約1年休み、治療に専念していました。大学が遠方だったため地元の病院に入院したのですが、わざわざ友だちがお見舞いに来てくれてたくさん励ましをもらったり、退院後にはおかえり会を開いてあたたかく迎えてくれたりと、本当にいい仲間を

持ったと実感しました。また、治療後もさまざまな人に支えられ、人のあたたかさに触れて感動しました。入院中は同じ部屋にはご年配の方が多かったのですが、「STAND UP!!」を知り、同世代の同じ悩みを抱える仲間にも出会うことができ、つながりがまた広がりました。

現在は復学し、保育士、幼稚園教諭になることを目指し、大学4年生として一人暮らしをしながら就活と実習を中心とした学生生活を送っています。私の病気は完治まで10年かかるので、通院と検査で経過観察をして気長に待ちたいと思います。

がんになったことを通して、新しい出会いがあり、自分の人生観も変わりました。新しい学年の友だちもでき、交友関係が広がり、普通の人と同じように学生生活が送れること、生きていることが幸せなことだと感じるようになりました。この経験は決して無駄ではなく、堂々と人に隠さず話をする、自信を持ってさまざまなことにチャレンジしていこうと思えることなど、私の人生にいい意味で影響しています。これからは新たな自分として、支えてくれて周りの人に感謝しながら明るく前向きに生きていきたいと思っています。



たくさんの人に支えられて乗り越えられました!



## 感謝をつたえる

私が胃がんであることがわかったのは2013年2月末でした。半年ぐらいい前から胃が痛いとは思っていたのですが、食事をすれば治るし、酒も飲んでいくから「胃が荒れているのかな？」程度の認識でした。しかし、あまりにも長く続くので検査にいかうと思いはじめた矢先、自宅にて下血してしまい、急遽入院することになりました。

検査では当初大きな胃潰瘍があると  
いう診断でしたが、入院7日目にがんであることがわかりました。横に広がっており55mmの大きさでした。がんを告知されたときは本当に泣きましたし、人生でこれほど泣けることがあるのかと思うほどでした。私には妻がいて、5歳の息子と10カ月の娘(当時)がいますが、これからの生活や余命、治療のことなどを考えると恐怖で眠ることもできず不安でいっぱいでした。妻の手を握っては

No.02

有川 雅俊

(35歳／罹患年齢：33歳)

社会福祉士・精神保健福祉士

胃がん

涙を流し、「なぜ私なんだ？」とずっと泣いていました。職場に最低限の引継ぎをしいった時も、泣いていました。

がんというのは、本当に冷たい響きを持つ言葉です。娘が生まれて初めてのひな祭りで、両家の家族も集まりましたが、がんの治療を報告する重苦しい会となってしまいました。この日のことをおそらく一生忘れることはないでしょう。手術では胃と脾臓の全摘と小腸の一部、第2リンパ節までとりました。幸いにも他臓器への転移はしていませんでしたが、胃がないことで食事は未だに上手にとれませんし、貧血のため異常に疲れてしまい、通勤も途中で休憩しながら出勤をしています。以前のように残業もできなくなりました。毎食後に低血糖になって意識を失いそうになることも日常的に起こります。そんな日々で、私は『自身を赦す』(以前のようにはできなくなった自分を認めていく)練習をがんと向き合いながらしています。

この病気の体験は多くの人に気づかされます。その中で最も大切な気づきは、多くの人に支えられて生きているということでした。今の私にできることはその方々に感謝を伝えることです。そして、私が最初に感謝を伝えるべき相手は妻でした。

私は退院してから一人で婚約指輪を作りに行きました。私たち夫婦は結婚当時あまりお金がなかったので、婚約指



この量を食べるのに1時間以上かかっていました。

輪を作っていなかったのです。チャペル付きのレストランを予約し、妻を食事に誘い改めてプロポーズをしました。私は病気になってできないことも多くなってしまったけれど、それでも一緒にいたいと思っていると行って、6年遅れの婚約指輪を渡しました。沖縄の方言で「命ぬ水」(ぬちぐすい)という言葉があるそうです。効果もあるけれど、副作用もあるそうです。きつと私たち夫婦にとつての命ぬ水は6年遅れの婚約指輪です。効果はお互いを思いやる気持ちが強くなること。副作用は涙もろくなること。

がんになったことで多くの人との出会いと優しさに触れ、日々感謝しながら生きています。いつか終わりが来るのであれば、恥をかいても何かに挑戦し続ける人生でありたいと思っています。



No.03

原木 櫻

(28歳/罹患年齢:25歳)

自営業

乳がん

## 治療を乗り越えた 先にあったもの

25歳の春、左胸にしこりを見つけたのが闘病の始まりでした。病院に行くにあれよあれよという間に検査が進み、左胸は乳がんだと宣告されました。告知された時は現実感がなくて、一緒に告知を受けた親を私が励ましていたのをよく覚えています。

治療は半年間の抗がん剤から始まり、左胸全摘出の手術とシリコンを入れる胸の再建手術で計1年間要しました。私は抗がん剤の副作用が出にくい体のようでしたが、薬を投与してから1週間は吐き気と怠さに襲われ、ベッドから動く

ことができませんでした。1週間過ぎると吐き気が落ち着いてくるので、次の投与までの2週間は外出したり好きなご飯を食べることができました。そこで気晴らしをして半年間の抗がん剤を乗り切った感じですよ。

抗がん剤の後は胸の全摘手術、再建手術を行いました。今まで健康に生きてきた自分はもちろん手術は初めてで前日は緊張してほとんど眠れなかったのを覚えています。

私の場合、残念ながら治療は1回で終わりませんでした。胸骨にがんが確認

され、最近腰骨に転移したため圧迫骨折を起こしてしまい、3週間の寝たきり入院を経て現在はコルセット生活を送っています。こうやって病氣と向き合うたび、なぜ私のがんになってしまったのかという葛藤が襲いつらい気持ちになる事も多いです。残念ながら私は「色々な経験ができたから、がんになってよかった」とは思える人間ではありませんでした。それでもがんになって気付かされた大切なものはたくさんあります。

まずは両親です。父母は本当に私に献身的に尽くしてくれました。検査を受けた時も圧迫骨折で車いすに乗っていた時も、「本当は年齢的に逆なのにね」と笑いあったりしていました。いずれ父母を介護する側になったときのために体を健康にしたい、そんな思いで病氣と闘っている部分もあります。

次に友だちです。一度目の治療が終わった時、私のためにお疲れ様会を開いてくれ、色紙を用意してくれました。もらったときは号泣しました。結局再発してしまっただけなのに思いを無駄にしてみました、という苦しみもありましたが、それを受け入れてくれた友だちみんなに感謝しています。

最後に恋人です。私には6年付き合っている彼がいて、がんを発症する前からの付き合いです。彼は最初がんになったときからずっとそばにいてくれました。彼も私の病状や抗がん剤治療の様子を見るたびに「よかった」と思います。それでも彼は私から離れず、ずっと付き合ってくれたのです。現在もホルモン剤治療を続けているため、妊娠は絶望的だと思います。そんな私を受け入れてくれる彼には本当に感謝です。大切な宝物です。

いま私は新たながんと戦ってる最中です。20代のがんは高齢者のがんとはまた違う葛藤と苦しみがあります。それでも支えてくれるみんなと一緒に、私は限界までがんばって乗り越えていこうと決めています。



一度目の闘病を終えた時に友だちからいただいた色紙です。宝物として部屋に飾ってあります！

No.04  
**内山 友希**  
 (25歳/罹患年齢:19歳)  
 福井ミラクルエレファント  
 (野球選手)  
 悪性リンパ腫



もう大好きな野球はできないのか…

私が悪性リンパ腫と診断されたのは2009年3月、大学2年生を迎える直前のことでした。

体に異変を感じたのは半年程前の夏。吐き気、胃の痛み、倦怠感など。何度となく近くの町医者に行くものの、風邪や胃炎などの診断で症状は悪化する一方。またともに食事も摂れなくなり、ついには血便まで出始めました。丁度この時期、野球部の合宿中でしたが、ただ事ではないと感じ、すぐに実家に帰り大きな病院

に向かいました。結果、その場で入院。1週間ほど検査をした後、両親の口から「腫瘍ができています」と告げられました。

その時の両親の表情、雰囲気から良性の腫瘍でないことには察しがつきました。翌日には、主治医から病気に ついての治療法、薬の副作用まで細かく説明があり、病室から外を眺め色々と思いを巡らせ泣いたことを思い出します。その後、治療はすぐに始まりまし た。抗がん剤は私の想像を絶するものでし

た。吐き気、倦怠感、指先のしびれ、味覚障害など、さまざまな副作用に苦しみました。加えて、腫瘍が十二指腸を圧迫していたため、約3週間の絶食を余儀なくされ体重も10kgほど落ち、野球をやっていたとは思えない体になってしまいました。痩せ細っていく体を見ては、主治医に「僕は野球選手なので、点滴だけでもカロリーを多く摂らせてください」とお願いしたことも覚えています。

そんな心も体もどん底の状態の中、私の心境を変化させる出来事がありました。ある日、気分転換にと屋上にクラブとボールを持って行きました。ボールを捕球しようとした時、一瞬にして膝から崩れ落ちました。私はショックを隠しきれずに病室に戻り、母に話しました。母は何とも言えない表情で、必死にかけて言葉を探していました。この時、私は「病気で闘っているのは自分だけではない。心配してくれている人たちのためにも頑張ろう」として、「もう一度野球をやりたい」と、心底強く思いました。

その後、抗がん剤治療をしながらリハビリに励み、半年後、無事寛解して今に至ります。そして、夢であるNPB(プロ野球)入りを目指して独立リーグでプレーしています。

多分、病気をする前の私ならば、ここまで野球を続けることは出来なかったと思います。なぜか？それは病気が私を変えてくれたから。死というものに恐

怖を感じ、生きていくことのありがたさを知ったからだと思います。どんな人にも与えられた時間は平等ではないということがわかりました。そんな時間を、私は誰のためでもなく、自分のために悔いなく生きたいと思いました。そこには、これまでの慎重に物事を考える私はありませんでした。答えの出ない先に不安を感じ躊躇するより、今を悔いなく生きることこそ、後悔しない人生をまっとう出来るということを確認した自分がいからです。

そして気付けば、私の周りには多くの人の姿があり、その優しさを感じる自分がありました。つらく、苦しい思いもしましたが、この経験が私を大きく変えてくれました。そして、何にも換えることのない出来ない一生の心のお守りとなり、私の道しるべとなりました。

(2014年10月現在)



治療中お見舞いに来てくれた野球部の友人と。



No.05

大野 舞子

(39歳／罹患年齢：34歳)

役員秘書

乳がん

## 晴天の霹靂

”晴天の霹靂“とは、こんな時に使う言葉なのだ実感した出来事でした。34歳の初夏、毎年受けていた健康診断のオプシオンで受けた婦人科検診。その場で医師から疑わしき腫瘍があることを告げられ、翌日には紹介状を手に大野病院へ向かいました。そして1ヵ月後の夏の暑い日、私は告知を受けました。覚悟はしていましたが、保っていた自分が崩れ、主治医の目の前で涙をこぼしました。

入院・手術に際し、ソーシャルメディアで同じ病院、病氣の人を探しました。すると一人の女性からすぐに連絡が入り、病院の環境、手術、先生のことなど、たくさん情報くれました。そのおかげで私は不安感を全て取り払って入院することができました。入院中、その女性がお見舞いに来てくれ、初めて顔を合わせました。見ず知らずの私からあらゆる不安感を取り除いてくれ、絶対的安心を与えてくれた彼女には、感謝の念が尽

きません。「自分は他者に対して、こんな優しさを持って生きてきたのだろうか」と考えさせられ、そして反省しました。手術は無事終了し、幸い転移はありませんでした。

しかし病理の結果、治療の選択肢に抗がん剤が出てきました。私のがんのステージからすると抗がん剤の使用はグレイゾーンであり、効能などを考えても未知数、「必ずするべき」というわけではなく、自身で決めてほしいと主治医から説明を受けました。副作用や子宮への影響などを考え、私は一つの質問を主治医に投げかけてみました。「一個人としての考えを聞かせてほしい」。すると主治医は「大野さんは、生きようと思えば、平均寿命から考えると、あと40年くらいは生きられる。もし仮に再発した時に、あの時やらなかったらとか後悔することがないようにしたい、僕の家族、身内だったらやってもらいます」と答えました。そして最善な治療方法だということを理解し、抗がん剤に臨みました。

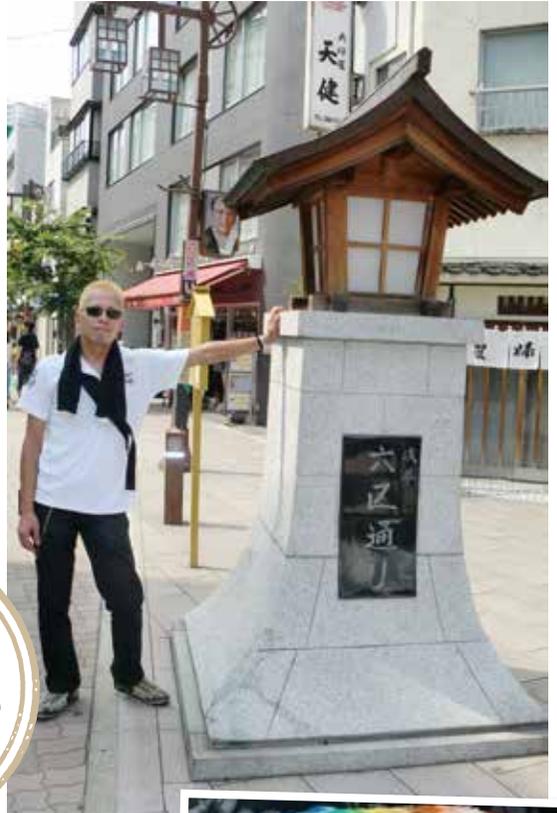
当初、手術・放射線・ホルモン療法などの流れから、2〜3ヵ月で通院も落ちつくと思っていて、職場には病氣のことをほぼ伝えていませんでした。脱毛による外見の変化や抗がん剤に耐えうる自分の体力などを考え、仕事を辞めることも考えましたが、働いていると病氣のことを忘れてる自分に気付き、仕事は

自分を救ってくれているのだと実感し、職場に理解を求めて休職せずに続けました。朝の通勤時に気分が悪くなってホームに座り込んだり、抜けていく毛髪に嘆き悲しんだりした時もありましたが、授与日以外は仕事を休むことはありませんでした。初めてウィッグを被って出勤した日、上司から「大丈夫？」ではなく「似合っていますよ」という思いやりあるメールをもらい、職場の人にもたくさん見守る優しさももらいました。

現在もホルモン療法を継続していますが、元気に過ごしています。家族、知人、あらゆる人に支えられ、今の私があります。病氣になって、人のことが前より好きになりました。潜在的にでもその人を救えるような言葉をかけることが出来る人でありたいと思います。がんなったからといって、悪いことばかりではありませんでした。あらゆる人からたくさんの愛に接し、私は、幸せ者だと感じた時でもありました。



最後の抗がん剤を投与する数日前、「さらば坊主!」と思い記念写真、こんなことも今となっては良い経験。



## がんになったのも運命だから

No.06  
**越澤 亮太**  
(34歳/罹患年齢:29歳)  
会社員  
悪性リンパ腫

僕ががんだと告知されたのは29歳の時でした。

当時勤めていた職場の人から「首あたりがおかしいから病院に行った方がいいよ!」と言われて近くの町医者に連れて行ってもらいました。そのころ忙しく働いていた僕は、だいぶ前からしこりがあるのは分かっていますが、痛くないため気にしておらず仕事も休めてゆっく

できるかなと思いつながら軽い気持ちで診察を受けました。何か薬でも出してもらうだけだろうと思っていた僕に先生が

「うちの病院では無理だから大病院を紹介するので明日朝一番に行ってください!」とのこと。

「ん?」と思いつながら次の日ししぶしぶ大病院に向かいました。一通りの検査をした後に先生が「緊急入院して下さい



仲間からの応援に支えられました!

治療を開始できるようにしよう」と慌てた様子。まだ病名も告げられていない僕は理解もできずに呆然としていました。

一度帰らせてもらい会社で説明すると「しっかり診てもらってこい」と言われ、数日後入院することになりました。さらに細かい検査をしてがんと告知されたころには、たぶんそうなんだろうと思っていたので、驚きもせずに他人事のように過ごしていました。会社は、仕事の内容がこの病気にはダメなことが多かったので、辞めることにしました。

入院生活で暇をもて余してまともに病室にも居なかったのですが、お見舞いに来てくれた親戚がこのフリーペーパーの1号を持って来てくれました。読んだ時に初めて小児がんという言葉を知り、同世代や僕よりも若くて小さい子たちが同じような病気にかかって治療を

受けて頑張っているんだと思い、その時やっと自分はがんなんだということを受け入れられた気がします。相変わらず病室には居ませんでした。その日から多少は真面目に検査や治療を受けることができたと思います。

2年くらいかかりましたがその後の治療は順調で、体調の良い日は親戚の会社の手伝いや知り合いの所でアルバイトができるまでに回復して、現在は親戚に紹介してもらった会社で毎日楽しく働いています。

がんだということは仕事をするのにマイナスになりそうですが、会社の方々の理解もあって何一つ困ることなく過ごせています。

この病気になったことでできなくなったこともたくさんあるし失ったものもありますが、それ以上に普通では味わえない経験もできたし、同じようにがんを経験した仲間と知り合えたことがプラスになったと思います。

これから先もいろんな所で知り合う人が増えていくと思いますが、こんな奴でも治って病気になる前より毎日楽しく生活している!ということを見せつけてやりたいと思っています。

運命という言葉があるとしたら、僕ががんになったのも運命かもしれませぬ。そして治ったのもまた何かの使命であるような気がするから、どこかで何かの役に立ちたいと思います。

No.07

鈴木 綾子

(26歳/罹患年齢:14歳)

歯学部生

胚細胞腫  
(脳腫瘍)



## 生きてるだけで丸儲け

眩しいの一言から私の闘病生活は始まった。大泣きをした翌日、目がおかしいことに気づいた。こすりすぎたのか、目の前がかすれてよく見えない。地元  
の眼科を受診後、すぐに大学病院へ。普通の視力検査のあと、視野検査を受けた。自分では見えている範囲に変化はなかったが、見ていた母親は不安だったのではないかと思う。あの時の私は、手のひら大の記号さえ、切れ目がわからなかったのだ。

その後、いくつかの検査を受けたあと両親だけが告知を受けた。両親が医療従事者であったこともあり、私は両親から自分の病気について説明を受けた。医学書で腫瘍のある場所を教えてもらい医学書のコピーにたくさんメモをとった。手術を終え、病室に戻って数日後、化学療法をすることが決まった。私の腫瘍は脳下垂体の奥の方でもとでも取りにくかったそうだ。細切れに取った腫瘍は病理の結果悪性であることがわかり、取り

きれない部分を抗がん剤で叩くことになった。全部で6クール。4月末に鎖骨下静脈のカテーテルを挿入、5月から抗がん剤投与が始まった。始めてすぐ、一番嬉しかったことがある。手術後も目の前がかすれていたのだが、それが急激になくなったのだ。目が見える、嬉しくてでもうまく伝えられなくて苦戦したのを覚えている。ガラスにハンドクリームを塗ってぼやけていた景色が磨いたばかりのガラスに変わったのだ。

しかし、副作用との戦いもすぐに始まった。

投与初日、トイレに行ったあと立ち上がれなくなった。頭の中が真っ白になり、ナースコールを押した後、座り込んでしまった。意識が飛んだのはその1回きりで、その後はとにかく気持ちが悪かった。午後から夜にかけては投与しないためか少し回復するので食べられるだけ食べることにした。抗がん剤投与をしてから嗅覚が敏感になり、病院食はほぼ食べられなかったのだ。母親に持つてきてもらったものを温め直して食べていた。あのころは始終タオルで鼻を覆っていた。味覚も敏感になり、水も味によっては飲めなかった。

けれど、この食い意地のおかげか、抗がん剤投与中以外は元気に走り回っていた。入院中に英検に挑戦したこともある。食べられるだけ食べて、やりたいことを存分に、入院中だからといって

ベッドの上でおとなしくしていることは少なかった。

入院中も、今も、私はどんな環境でも自分らしく生きたい。その願望のままにあの時から生き続けている、走り回っている。いつも見守ってくれている家族や友だちがいなかったら、今こうして頑張れてはいないんだろうな、いつも思う。1年弱の入院生活も、退院後待ち構えていた高校受験も、その先の長い長い浪人の末入学した大学生活も。自分一人だったら絶対に乗り越えられなかったと思う。

感謝しても足りないけれど、生きてるだけで丸儲け、そんな風に自分らしく日々生きています。



闘病仲間であり家族です！

No.08

眞部 賢太

(23歳/罹患年齢:19歳)

大学生

精巣腫瘍



You' ll never walk alone !!

一人暮らしにも慣れ気ままに生活していた大学1年の冬、血痰が出たため近くの医院でレントゲンを撮ってもらおうと、肺に無数の影が発見されました。先生には「白血病かも?」と言われましたが、自分に限ってそんなことはないだろうと思っていました。しかし翌日紹介された病院で精巣腫瘍と発覚し、そのまま闘病生活スタートとなりました。当日の朝診察して夕方に精巣摘出手術と、スビード感がありすぎて頭がついていきませんでした。

〈闘病生活〉

闘病生活をする上で、治療のつらさはもちろんのこと、自分自身とどう向き合うかすごく大変でした。初めは流れに任せて治療していましたが、2クール目の化学療法を終えたころ、ゴールの見えない現状と想像以上に深刻な状況を受け止めきれなかったことでパニックに陥りました。何をしても、何をしてもなくてもただつらく、感情のコントロールができなくなりました。治療をやめたい、生きていく意味がないんじゃないかとさえ思いました。

その状況を救ってくれたのは周囲の人でした。家族をはじめ、臨床心理士や看護師、主治医、患者会代表さんや同じ病院で治療し社会復帰した先輩、お見舞いに来てくれた友だちなど、挙げればキリがありません。対話を通して「絶対治してこの人たちに恩返ししなきゃいけない」と思い、治療する意味を見出すことができました。意味を見出せたことで自身の状況を理解しようとした心の変化も治療を乗り越える上で大きなものだったと思います。

1年2カ月間で合計11クールの化学療法、3度の手術や放射線治療と振り返ればよくやったなと思う治療を成し遂げられたのは、他でもなく周囲の協力があつてこそだと強く感じています。治療を終え、寛解して病院を出ることができた日のことは一生忘れないでしょう。

〈振り返って〉

最近まで、がんになるってものすごくマイナスなことだと思っていました。治療で体力が低下したり、1年半休学して他の人に後れをとったりとつらい経験ではありました。しかし、今ではがんになったからこそ、見えていなかった大切なことを知れたというプラスなこともあると感じています。

1つは「当たり前前のことは当たり前前でない」ということです。大げさではなく、日々大学に通い、サークルに行き、友だちと遊んでいたこと、さらに言えば食



高校時代の同級生がボールに寄せ書きしてくれました!

べたり、寝たりできることはホントに素晴らしいことなんだと感じました。もう1つは「自分は決して一人ではない」とです。闘病生活では、何気ない普段の生活は周りの人の協力があつてこそ初めて成り立っていることを実感できました。退院後の生活では患者会などを通して、若くしてがんになっても乗り越えて元気に活動している人に刺激を受け、悩んでいるのは自分だけでない、自分にもできるんだと前向きになることができました。この2つの気づきはこれからの人生に大きな糧になると思います。

〈最後に〉

今これを読んでくださっている方はそれぞれ異なった状況、状態にあると思います。でも「ひとりじゃない」とはみんな同じです。家族、友人、病院の人、がんと闘う仲間たち。みんな、あなたと共に前を向いて歩んでいます。一人で悩まず、物事に必ずあるプラスの部分を見つけて共に頑張ってくださいませ!



## 闘病生活を経験して

No.09

大倉 理恵

(38歳／罹患年齢：13歳)

専業主婦

急性骨髄性  
白血病

中学2年生の5月のある朝、とにかく体が重たくて、どうしようもなかった私は軽い気持ちで体温を測ってみました。すると微熱が、「やった。休めるー」。しかし、その後も熱はどんどん上がり続け、ついに40度にまで達しました。「肺炎のため1週間入院」、そう言われた数日後には、なぜか自宅から車で1時間以上かかる大病院に転院することになってしまったのです。

毎日さまざまな検査を受け、点滴をさ

れ、ひどい貧血で起き上がれなくなっていく自分。また、抵抗力が下がるために口内炎がひどく、話すのもつらくて、筆談での会話を余儀なくされました。治療するほどつらくなっていく身体にストレスも溜まり、そのイライラをノートに一人書き殴ることもありました。

ある日、母から私が「白血病」である事を聞かされました。恥ずかししながら、病名を聞いたことがある程度で、具体的にどんな病気なのかは知りませんでした。

数カ月後、外泊許可が出て、久しぶりに自宅に帰ることになりました。その時、「こっそり」白血病“がどんな病気なのかを調べよう”と思っていました。当時はまだインターネットも身近なものではなく、部屋にあった子供向けの百科事典で調べることにしました。緊張しながらページをめくると、そこには「やがて死ぬ」という文字があったのです。家族の前では平静を装っていましたが、病院に戻って抱えきれなくなり、つい看護婦さんの前で「私、死んじゃうの?」と思わず泣いてしまいました。自分の死について、初めて身近に考え、恐怖を感じた瞬間でした。

あとになって、その当時のデータを調べたところ、5年後生存率は20%だと分かりました。入院生活を送りながら、将来は病院で、患者さんの精神的なサポートが出来る仕事に就きたいと思っていました。そのためには、中学を卒業して、高校に行って、大学を出て、資格を取りたい。でも、それまで生きていられるのか……?一度は、中学を卒業して、そのまま高校には通わずに、病院でボランティアをしながら、死を待つことを考えました。しかし、そのことを母に話すと、思いがけない一言が返ってきました。「もし、死ななかつたら、その後どうやって生きて行くの?」私はは衝撃的な言葉でした。悩んだ結果、退院後は中学に再び通い、高校、大学と学習する機会を

得ることができたのです。

その後、紆余曲折を経て、寛解から20数年が過ぎました。白血病になって入院・治療を経験したことは、確かに正しいことでした。しかし、そこから得たものが、今の私を育ててくれたと思っています。多感な時期に体験したことは、今も私にとって、生き方を考える上で大きな道標となっています。

そして今、そんな私だからこそできること……経験から得たものを発信していくという新たな一歩を踏み出してみようとしているところです。

マイペースな人生ではありますが、周りのサポートに感謝しながら、後悔のない日々を送りたいと思います。



治療の合間に大部屋の人たちと病院の中庭でピクニック気分!



## 失ったものもあるけど、 それ以上に多くのものを得ました

27歳の時、私はある病気であることを宣告されました。その宣告された病名は、大腸がん、直腸肛門がんステージIV末期がん。この状態だと30歳までは敵しいでしょう。俗に言う余命宣告でした。

その時の私は頭が真っ白になり、「なんで全身火傷で苦しんで(3歳の時に全身80%火傷を受傷)、今度はがん、しかも人口肛門」「なんで私だけがこんな思い

をしないといけないんだらう、お酒もたばこもやらないのに」「子どもたちに柔道を教えながら国体予選などの大会にバリバリ出ているのになんで？ ありえない」と強く感じていました。

13時間に及ぶ手術、再発や転移により身も心もすり切れていき、一時は精神的にキヤバを超え、自殺未遂すらしていました。

途方に暮れていた時に主治医の先生に「患者会があるから出てみたら」と言われました。過去に県外の患者会に参加して思うような結果にならなかったので躊躇していましたが、「地元だし、気になるし、一回ぐらいは参加してみようかな」と思い不安のなか参加しました。そこは不思議な場所でした。初めて会った人たちの前で泣きじやくりながら、誰にも話したことのない心に溜めてあったものを、知らず知らずのうちに全てと云っていいほど話していました。

話し終えて我に戻ったとき、周りの皆さんと一緒に泣いてくださっているのが付きました。私自身ビックリでした。そしてある方が「つらかったね、全部吐き出せた？ 良いよ。ここはがんの種類は違うけど、同じ境遇やつらさを経験している人たちだから、一人で背負い込まず話をしてね」と言ってくださいました。その瞬間、人目もはからず大泣きをしてしまいました。そして他の方の壮絶な病気の話を聞いているうちに、「一人がつからい思いをしているのではない」「二人じゃなかった」と心の底から思えました。

私は今まで本音を隠してきました。「言っても解ってもらえない」「変な同情や誤解は生みたくない」そんな思いがあ



生徒たちからの千羽鶴 & メッセージカード

りました。しかしここは「話をしている場所」でした。私は他のがん患者さんの話を聞くことによって共感し、つらい抗がん剤について笑って話せる力をもらいました。また、話したことで楽になりました。多くの人が私と一緒に泣いてくれた。来てよかった。こんなに心強いと感じた時はありませんでした。私に憑いていた何かが取れた、そんな感じでした。

その後「リレー・フォー・ライフ・ジャパン信州まつもと」に実行委員として参加し、多くの方との交流を経験するなかで、自分を変えていくことができました。がんになり失ったものもありますが、それ以上に得たものがたくさんあります。きっと晴れるから私はがん晴ります(方ナリります)。

# ひらめいた♪

こんな使い方もアリ・・・?!

イラスト / 川原ナツミ



# がんと闘う仲間たち

文・構成／岸田徹、中陳香織

今まさにがんと闘っている仲間たちは全国にいます。  
がんばっているみなさんにメッセージをいただきました。



稲葉 直 さん

私は子宮体がんで、2014年4月に子宮と卵巣の摘出と、骨盤リンパ節郭清という手術を受けました。手術前の検査では手術をすれば終わりということだったのですが、悪性度が高かったこと、そして肺に転移が見つかったことで現在TC療法という抗がん剤治療中です。副作用とうまく付き合いながら、仕事も遊びも精一杯楽しんでいる毎日です。ふと弱気になってしまうこともあります。病気になったから気付いたこともたくさんあります。闘病、がんばっていきましょう。

線維形成性小円系細胞腫瘍は、進行が早く再発性も高いのが特徴の、青年期から若年期に多いがんです。宣告から2年以上経ちますが、現在も治療を続けています。完治の見込みは未だにありませんが、薬の効果や新薬の情報を希望に前向きに闘病しています。しかし、病状が好転と悪化を繰り返す中で、自分の将来が見えずに悩んだり、死を身近に感じて不安になることもあります。そんな中で絶望せずにいられるのは、家族や友人、医療関係者の方々など、自分を支えてくれる人たちのおかげです。がんになることは不運ではありますが、不幸ではない。それを証明するような人生にしていきたいと僕は思います。がんになったことも含めていい人生にできるように、まずはがんを克服しましょう！



堂前 皓樹 さん

私は卵巣がんのため、片方の摘出手術をした後、抗がん剤治療を4クール行いました。現在は大学に通いながら2か月ごとに検診に行っています。入院中は、他の人からの何気ない言葉に傷つくこともありました。「なんで自分が？」って思うこともありました。ですが、病気になったからこそ、考えられたこと、気付けたことも多いと思います。また、支えてくれた人への感謝も大きいです。闘病中はしんどいと思いますが、闘っているのは1人ではありません！みんながそれぞれがんばっていると思って、一緒に乗り越えていきましょう(^)



岡田 夏実 さん



追立 純嗣 さん

私は昨年神経膠芽腫が二度目の再発をし、現在経過観察中です。20歳の頃に罹患したのもう15年になります。ネットでは再発した場合は数カ月と書かれている悪性のものですが、今も仕事をして生活できています。皆さんも嫌なネットの情報を気にすることはありません。笑顔は病気に対する免疫力を作ると聞きます。私がまだ生きているのは笑いを忘れなかったおかげだと信じています。嫌な情報は気にせず、一緒に笑ってがんばりましょう！

スキルス胃がんで最初は卵巣転移も疑われていましたが6クルールの抗がん剤でかなり良くなりました。しかし腹膜播腫があり胃の摘出手術は受けられない状態で、手術を目標に治療中です。私はがんになる前から心療内科に通っています。昔のリストカットの傷がある腕で治療を受けるとき、死ばかり考えていた自分が生きるための治療を受けていいのかと後ろめたくなります。現実を受け止められているのか自分でもよくわかりませんが、まわりの大切な人たちの支えでなんとか今生きています。



富田 英美奈 さん

こんにちは！私は22歳、大学在学中に急性骨髄性白血病(MO)という病気になりました。化学療法を経て、その後非血縁者間の骨髄移植を受けました。その後、退院し大学にも復学しましたが、半年後に髄外腫瘍が見つかり、現在も治療中です。病気になったことで家族や友人、周囲の人に支えられて生きていることを実感しています。また、普通に生活できることや健康であることのありがたみを身にしみるほど感じました。今後の不安もありますが、今は前向きに生きています。闘病している皆さん、治療はつらく大変なことも多いですが一緒に乗り越えていきましょう！



高橋 さやか さん

より良い闘病生活のために

# 『アピアランス支援センター』 を利用しよう！

文・構成/櫻井はるか

協力/国立研究開発法人 国立がん研究センター 中央病院 野澤桂子先生

手術・抗がん剤・放射線などの治療は、傷痕、髪・眉・まつげの脱毛、皮膚の黒ずみや乾燥、爪の変形や変色など、患者さんの体にさまざまな影響をもたらすことがあります。外見が変わったことで、悩みやストレスを感じている人も多いのではないのでしょうか？今回は治療による外見変化の相談に乗ってくれるアピアランス支援センター取材しました！

## Q アピアランス支援センターとは？

**A:** 治療の副作用による外見変化の悩みについて、相談に乗ったり、対処方法を一緒に考えたり、情報を提供してくれるところです。場所は、国立がん研究センター中央病院にあります。

## Q アピアランス支援センターが近くにない…という方

**A:** 四国がんセンターや九州がんセンターでも、国立がん研究センターと共通の患者サポートプログラムを行っています。また、これらの施設以外でも、国立がん研究センターのアピアランス支援の教育を受けた医療従事者の方が全国にたくさんいます（以下に紹介）。オレンジクローバーバッジが目印で、今回紹介している病院・医療従事者の方以外にもたくさんいらっしゃいます。見つけたらぜひ相談してみたいはいかがでしょうか？



オレンジクローバーバッジ  
アピアランス支援の研修を  
受けた証です。

## アピアランス支援の教育を受けた医療従事者のいる施設一覧

(2015年3月10日現在)

問い合わせの際は、  
「オレンジクローバーのスタッフ」  
と指名ください



- ① 恵佑会札幌病院 化学療法センター
- ② 青森厚生病院 外来化学療法室
- ③ 宮城県立がんセンター 第一外来
- ④ 白河厚生総合病院 がん治療支援緩和ケアチーム 5西病棟
- ⑤ 富山大学附属病院 外来化学療法センター
- ⑥ 栃木県立がんセンター 外来化学療法センター
- ⑦ 総合病院国保旭中央病院 化学療法センター
- ⑧ 埼玉医科大学国際医療センター 通院治療センター
- ⑨ 小川赤十字病院 点滴治療室
- ⑩ 東京医科歯科大学医学部附属病院 小児科
- ⑪ 日本赤十字社医療センター 化学療法室
- ⑫ 東京大学医学部附属病院 乳腺内分泌外科
- ⑬ 浜松医療センター 外来化学療法室
- ⑭ 市立奈良病院 外来
- ⑮ 滋賀県立成人病センター 外来化学療法室
- ⑯ 四国がんセンター 患者・家族総合支援センター
- ⑰ 九州がんセンター 4東病院
- ⑱ 国立がん研究センター 中央病院

# 国立がん研究アピアランス支援室長の 野澤桂子先生にインタビューしてきました!



ウィッグの種類が豊富!  
男性用もあります。



爪・眉毛・肌などのメイク道具や人工乳房。使用方法も教えてください。



耳や鼻など、病気によって失った部分を補ってくれるもの。

## 患者さんから、どのような相談を受けますか ?

### お悩み内容その1

ウィッグをつけたまま会社へ行かなくてはなりません。病気のことは言っていない人も多いなか、会社の人とうまくやっていけるか心配です。

### お悩み内容その2

治療により髪の毛がない状態で就職活動します。面接官にいろいろ聞かれないか心配です。

### お悩み内容その3

子どもとお風呂に入る時間は、手術の傷痕を隠して楽しく過ごしたいと思っています。隠す良い方法がありますか?

### お悩み内容その4

治療による外見変化がある状態で卒業式に参加します。肌の変化などをカバーする方法はありますか?

### 野澤先生からの言葉

外見が変わることで、他人との関係に悩む方が多くいます。「外見の変化を隠さなければいけない」、「ばれないよう上手くやらなければいけない」と一人で抱え込まず、ぜひ一度アピアランス支援センターやオレンジクローバーパッチを付けた医療従事者にご相談ください。また、肌や髪などのケアをする際、特別なことをしなくてはいけないと重く感じてしまう方が多くいますが、“肌や髪に合わないなと感じたら変える”とシンプルに考えていいのです。病気だからといって我慢せず、自分らしく過ごしてもらえたらいいと思います。

### 担当者のコメント

アピアランス支援センターは明るく、とても前向きな気持ちにしてくれる場で、行くだけで元気になれるような場所だと取材を通して感じました。このような支援を利用して、闘病生活を乗り越えられたらな、と思います。

# 私たちのライフワーク

## がんになったからこそ見つけた “目標”や“生きがい”があります！

思いのこもった10人の若年性がん患者たちのライフワークを紹介します。

文・構成 中島 千尋



香港マギーズを訪れて

### 鈴木 美穂 / 乳がん

24歳の時に乳がんを経験したことで、“ライフワーク”ができました。それは、がんになっても幸せを感じられる社会を作っていくために、あらゆる方面から自分のできることをやっていくこと。闘病中、何よりも苦しかったのは、その先の未来が想像できなかったこと。だからこそ、あの頃の自分と同じような状況の人たちに、当時欲しかった情報や居場所を届けたい。そんな思いから松井基浩さんと共に2009年にSTAND UP!!、2013年には闘病中でも安心して参加できるヨガなどのワークショップを提供するCue!という団体を立ち上げました。そして2014年、新たな夢を見つけました。それは英国発のがん患者と家族のための施設マギーズセンターを東京に建てること (<http://maggiestokyo.org/>)。がん患者や家族、友人が誰でも予約なく訪ねることができ、美術館のように魅力的で、教会のように自分と向き合うことができ、病院のように安心でき、家のように帰ってきたいと思える場所。2015年度中に、東京・豊洲にオープンする予定です。がんになったからこそ見つけたライフワークが多くの素敵な出会いに恵まれた今の私の人生をつくってくれていると、心から感謝しています。

### 向後 建 / 白血病

私は14歳で白血病を発症しました。当時は「告知しない」が普通でしたので、自分が受けた治療についての知識はありませんでした。私への告知は29歳の時に、親でもなく主治医でもない医師から病名のみ知らされました。白血病から25年ほど経過したころから左手足に違和感が現れ、いくつかの病院を巡った後に、晩期合併症としてパーキンソン病関連疾患の難病を告知されました。当初は、晩期合併症の存在すら知らず、その可能性や小児がん治療の詳細を自分で説明できなかったのも、最初は適当な病名を付けられ、処方された薬で症状が悪化していく恐怖も体験しました。このような経験から、小児がんの子どもに対してもある年齢になったら必ず告知をして、自分が受けた治療内容を理解し、自分で説明できるようにしておくことが重要だと思えます。そこで、小児がんの子どもを持っていた・いま持っている親たちへ告知の重要性と晩期合併症について理解してもらうため小児がん支援のゴールドリボンチャリティーグッズ製作&寄付をライフワークにして生きて行くことにしました。



## 徳永 寛子 / 悪性黒色腫(メラノーマ)



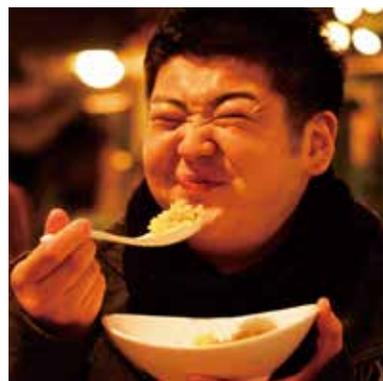
がんと告知され、治療が一段落した2013年夏に、日本で初めてのメラノーマ患者会 Over The Rainbow を立ちあげました。私が診断された当時は、いくら探しても患者会はなく、出てきたのは個人の闘病ブログ。その先に行き着いたのはネット上のコミュニティでした。「あの注射いたいいね」「そうそう!」なんていうほんの些細なことでも、共感してもらえた時に嬉しかったのを覚えています。同じ病気のことを思う存分話せたら、不安な気持ちが少しは和らぐんじゃないかな?と考え、「患者さんが話せる場所をつくりたい!」と思い、患者会を設立しました。まだまだ活動の幅も会員数も少ないけど、患者会があるというだけで、患者さんやご家族の心の支えになるんじゃないかと思います。その他にも、一般の方にもっとメラノーマを知っていただくため、啓蒙活動や要望書というかたちで新薬承認への後押しもさせていただき、2014年7月には、長い間変化のなかった治療薬がめでたく日本で世界初承認されました。希少がんゆえに孤独に感じた体験を元に、これからも仲間と共に活動していきたいと思っています。

## 水橋 朱音 / 上咽頭がん

14歳でがんになり約1年間、小児科に入院しました。思春期での入院ということもあり、自分の感情を表わすことが難しく、看護師さんに迷惑をかけないようにいい子でいようと演じていたこともありました。そんな気持ちに気づき寄り添ってくれた看護師さんに救われたことがきっかけで、将来は常に患者さんの身近にいる看護師として、思春期の子の心のケアや、退院後の複雑な感情に寄り添ってケアをしたいと思うようになりました。現在、看護学生となり日々勉強をしていく中で、今も自分自身がしっかりとがんと向き合えていなく、病気がきっかけで甘えることがうまくできなくなったことに気がきましたが、この気持ちを忘れずに、そっと寄り添い、手を差し伸べることができるあたたかい人になれることを目指していきたいです!

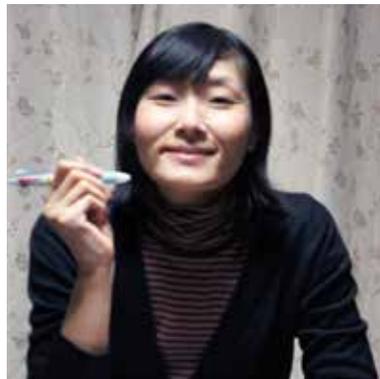


## 佐藤 崇宏 / 精巣腫瘍



私のライフワークは食べることです。おいしいものを食べる。家族や友人と食べる。どこかへ足を運んで食べる。元来食べることが大好きで、体調が悪くてもご飯を食べられないことなどなかった私が、抗がん剤治療の副作用によってご飯が食べられないことがありました。口に運んでもものを通らず、運ばれてくるご飯のにおいも受け付けなくなっていました。そんな中、少し気分が落ち着いた時、家族がけんちん汁とたけのご飯を病院へ持ってきてくれました。香りを嗅ぐとそれまでとは打って変わってすっとお腹が空き、一口一口噛みしめるように平らげました。私は今でもけんちん汁のあたたかさ、たけのご飯の歯ごたえをはっきりと覚えています。

そのことがあって以来、食べることの楽しさ、ありがたさを強く意識するようになりました。治療が終了し、日常生活も問題なく過ごせるようになった現在、食の知識を身につけるためにレストランでアルバイトをはじめました。地道に食の知識を蓄えて、いつか“天食”を見つけるのが私の夢でありライフワークです。



## 加藤 那津 / 乳がん

私は2009年に乳がんと診断され、乳房温存手術と放射線治療後、ホルモン療法を受けています。幸い早期だったので、数年経つと治療の副作用に慣れ、再発への不安も和らいできました。しかし2013年、温存手術を受けた乳房内の再発と診断されました。初発は早期で、決められた治療も受けてきたのに再発。ショックというよりは、以前から気になっていたことが頭をよぎりました。

私には若年性乳がんのおばと、男性乳がんのおじがいます。自分の状況を踏まえ遺伝子検査を受けるという選択をしました。検査の結果、遺伝子変異が分かり、「遺伝性乳がん・卵巣がん症候群」であることが確定しました。自分が遺伝性乳がんであること、そして通っている大学病院の大学院に遺伝カウンセラーのコースができたこともあり、私は遺伝カウンセラーを目指すことにしました。大学も大学院も文系でできたので学ばなければならないことはたくさんあるし、自分と同じ病気の人と接する中で壁にぶつかるかも知れない。でも、私は遺伝カウンセラーを目指します！

## 岸田 徹 / 胎児性がん(胚細胞腫瘍)

僕は、自分が“面白い”と思ったことをライフワークとして行っています。がんになって死を意識してから、自分は何か生きた証を遺せたのだろうかと思ひ、本気で「社会に貢献したい」という気持ちが強くなりました。僕の場合、自分の病気や後遺症について情報が少なかったため、インターネットやブログなどを通して情報を集めていました。すると、他にも闘病を乗り越えている人がいることが分かり、初めて見通しを持つことができました。その経験から、僕は『がんノート』というウェブページを立ち上げ、治療のこと以外で「今、闘病中の人を知りたいこと」をインタビューしてYouTubeなどの動画で配信しています。「がんになったから暗い未来が待っているんじゃない。がんになったからこそ、できることや明るい未来もあるんだってことを伝えていきたい」そのためにはまず自分が“面白い”と思うことをやろう。今では厚生労働省のあるがん関係のプロジェクト委員に抜擢していただいたり、僕がやりたかった社会貢献が少しずつできている気がしています。



## 箕輪 裕子 / 卵巣がん

卵巣がんと診断されて術前に化学療法を受けることになりましたが、病院やネットショップでケア帽子を探してみても、ドラマで見るがん患者がかぶっているようなものばかりでした。治療終了から1年後に再発した際に最初に頭に浮かんだことは「またあの帽子をかぶるのかぁ。嫌だなあ」でした。そのことを友人に話すと「そんなに嫌なら作ればいいのに」と、『あるものから選ぶ』という選択肢以外に『ないものは作る』という選択肢があるのだ！と知り、モノ作りの分野でメーカーになるための奮闘が始まりました。帽子のデザイン、生地選び、着用モデルから受発注業務まですべての業務をひとりで行うというチャレンジは、がんという病気に絶対に白旗を掲げないぞ！という決意表明でもありました。

現在、少しずつブログやイベントで取り上げていただけるようになりましたが、今後は全国のがん拠点病院にサンプルとパンフレットを置いていただき、私と同じように病と闘う方々のQOL向上の一助となることを目標にしております。



ケア帽子のお店Lapin

## 寺尾 啓 / 白血病

高校入試直前に発症。1週間に1回はお見舞いに来てくださり、希望の高校を受験できるように手配してくださった中学校の先生方や、入院中でも絶えず私に目を向けてくださり、私の身体状況に合わせて指導してくださった高校の先生方への感謝の気持ちが強くなればなるほど、「学校の先生になりたい」という小さいころからの漠然とした夢が、大きなものになっていきました。

大学生である現在、私は特別支援教育教員養成課程に所属し、主に障がいを抱えた子どもの教育について勉強しています。特に“病気を抱えた子どもの教育（病弱教育）”については、小児がん経験者という立場であり、より身近で一番興味がある分野なので、積極的に関わりたいと思っています。

将来に向けて、病気や障がいなどさまざまな困難を抱えた子どもも含めて、子どもに寄り添い伸ばしていくことの専門性を高めるべく努力していきたいと思っています。



## 堤 朋香 / ユーイング肉腫

私は入院中に理学療法を受けたのがきっかけで、自分も理学療法士になろうと思いました。現在は総合病院で主に術後の患者さんのリハビリに携わっています。リハビリでは疾患の特性を考え、患者さんの体調などをみながら、医師・看護師など、さまざまな職種と連携して患者さんに訓練を実施しています。

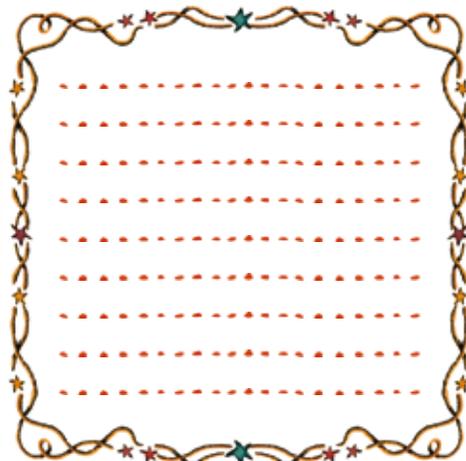
私が目指す理学療法士は、自分を担当してくれた2人の理学療法士です。2人はつらい治療中でもそれを忘れられるようなリハビリをしてくれ、高校の話をしたり、時には一緒に筋トレをやってくれたりして、たくさん笑わせてくれました。

入院するとこれまでと環境が一変し、精神的なダメージも少なからず受けると思います。私はそのような患者さんに、運動機能へのアプローチだけでなく、精神的にも元気になるお手伝いのできる理学療法士になりたいと思っています。今後は勉強を積んで、がんのリハビリテーションに多く関わられるようにしていきたいです。そして、目標とする2人に近付きたいと思っています。

がんになったことでつらい思いをすることがたくさんあると思います。

しかし、がんを経験したからこそさまざまなことに一生懸命になれるのではないのでしょうか。自分らしく幸せに過ごせることを願っています。

あなたのライフワークは何ですか？





A round-table talk about family

# 結婚した若年性がん患者が語る本音

進行・構成：白井裕美子 / 写真：中陳香織



熊耳 宏介 (32歳)

17歳で急性リンパ性白血病に罹患、21歳で再発。彼女いない暦6年を経て、最近結婚。



高橋 和奈 (28歳)

23歳で胃がん罹患。抗がん剤治療後知り合った彼と最近結婚。



垣田 友也 (33歳)

31歳で胃がん罹患。告白する2日前に告知。治療を経て結婚。



有川 雅俊 (35歳)

結婚5年目、2人目の子が10ヵ月のときに胃がん罹患。

- 新婚2人を迎え、結婚と家族について語りました。  
**知り合ってから結婚までの経緯を教えてくださいませんか？**
- ▼熊耳：いつも、長い期間をかけて慎重に付き合いを始めるほう。治療しているから子どもを作れるかわからないし、そういうことも含めて、この人ならわかってくれると確信を持てるまで徐々に進めていったよ。フリーペーパーを介して伝えたり。
  - ▼垣田：僕は付き合ってくださいと言おうとした2日前に告知され、それでも彼女に病気のこともすべて伝えたくて決めてもらいました。「がん」だって言うのと断りづらくなると思ってたけれど、結婚のことも考えていたし、彼女も大人なんだから自分で判断してくれるだろうと。
  - ▼熊耳：そうなんだ。
  - ▼垣田：それで、今日の座談会でこの話になると思って、どうして受け入れてくれたのか、理由を聞いてきたんですよ。まず「がんじゃなくても交通事故とか起こるかもしれないから気にしなかった」というのが一つと、やっぱり「断ったら可愛そうっていうのもあったって……。二つ目は今朝初めて言われた(笑)。
  - ▼熊耳：奥さんの「優しさ」と広い心“っていうことだ。
  - ▼垣田：それから奥さんのご両親に会ったらすごくいい人で、「おお、体大丈夫なん？」みたいな。ただ、最初に会ったのが手術から間もなくで、親戚と食事をしている時、胃がん術後なので脂っこいものは控えなきゃいけないのに、天ぷらに手を伸ばそうとしたら全員から止められちゃって。
  - ▼全員：(笑)それはダメだよ。
  - ▼高橋：私の場合は親戚の紹介。その親戚の人は病気のことは知らなくて、彼には付き合う時に自分から伝えたい。「次付き合う人は結婚する人」って決めていて、簡単には付き合え

ない」とも言ったよ。そうしたら、彼のほうも同じように思ってくれていて。

有川さんは奥さんと告知を聞いたの？

▼有川：いや、ものすごく胃が痛くて、検査しようかと思ってから数日後に下血しちゃうって。

▼熊耳：じゃあその場に奥さんはいなかったんだ。

▼有川：そう。ちょうど、2人目の子がまだ10ヵ月で、奥さんが復職準備をしていたころだった。

▼熊耳：じゃあ、僕は結構パニックになってたから、泣いているそばで同業者(ソーシャルワーカー)の奥さんが冷静に対応してくれていたと思う。

▼有川：彼女もショックを受けていたと思うけれど、「一番衝撃を受けているのは旦那だ」と思ってたが、奥さんにはすごく感謝しているよ。

▼熊耳：言うタイミングは難しいけど、俺は友だちの段階から徐々に伝えていったけど。

▼高橋：そうだよ。

▼熊耳：友だちでも誰でも、伝えたい相手に言うでしょ。その延長に彼女がいたって感じかな。

▼高橋：私は前に出会った人とダメだったな。私の病気について「マジで？」みたいな反応していたって、風の噂で聞いたし……。

▼熊耳：男って無駄に責任感強くて、勝手に「俺

で守れるかな？」とか考えちゃうからじゃない？

▼有川：僕も仕事でいっぱいばいばいな時、そんな話とか介護とかの話の聞いたら無理かも。男性の方が引く気がする……そんな話をちよつと奥さんともしてました。

▼熊耳：うちは病気のことを彼女に話したら、「病気で再発もして、2回死んでるみたいなのでも、それでも生きてるんだから、それだけの強い生命力もあるし、精神力もあるし、だから安心かな」と言われちゃったよ。それはそれで結構プレッシャーだよ(笑)。

▼全員(笑)

▼熊耳：でも、そういう経験をしてるから、優しさとか、周りへの気遣いのある熊ちゃんがいいんだよ。

▼高橋：のろけだね。

▼では、パートナーは病気のことをどれくらいわかってると思いますか？

▼垣田：治療の初めから見ているし、ある程度は。それと、食事のことか自分の弱点を知っているっていつか。

(しばらく胃があるある話で盛り上がる3人)

▼有川：子どもたちもそう。お父さんがよく吐いているから、慣れたのかな。他所の子と遊んでいる時も「うちのお父さんは無理だから」みたいな気を使ってくれることもあったり。鬼ごっこ

の鬼なんてやったら、フラフラで倒れちゃうからね。でもやっぱり子どもたちには悪いなって気持ちはあるよね。

▼高橋(笑)：あと、食事のことだけじゃなく、何ができるか、何ができないかをわかってくると楽だよ。その日によって体調も違うし、疲れやすいとか、怠けているんじゃないかって休んでるとか、一緒に暮らしていくうえで、そういうのが大切だと思って。

▼熊耳：俺の場合、血液系のがんだから入院は長かったけれど、治っちゃえば(胃が)のみんな

と違って(全然普通なんだよねで、残業とかも人以上にがんばっちゃったり。でも、体は大切にしていけないとダメだね。もう一人じゃなくて、一緒に暮らしているんだし、「家族のフレーム」で自分のことも考えていかなないと。

▼高橋：あとは、相手がわかってくれていても、そのご両親とかどこまで理解してくれているかは心配になるかな。

▼熊耳：それはあるよね。実際今元気だし、向こうはそこまで病気の知識も無いだろうし。大事なことは徐々に伝えていければいいだろうね。

みんなが聞きたいこと……

精子・卵子保存はどうしたの？

▼熊耳：この中だと俺くらいだもんね。精子は3回分取って保存したよ。やっぱり将来、子どもが欲しいと思ったから。たくさんの薬を体に使っているから、精子が生きているかどうか心配になるよね。もちろん保存した精子だって完全に元気ってわけじゃないけれど、それと今の自分のと、どちらが元気に運動しているか……保険的な意味合いもある。

▼有川：それは今も取ってあるの？

▼熊耳：それがね、ちょうど最近破棄したの。実は保存するのにも年間いくらってお金がかかるから、考えて今の自分の精子の運動がどの程度か調べてもらったんだ。結果、保存している精子と変わらなかったから、思い切って捨てたわけ。

▼垣田：お金がかかるんですね。

▼熊耳：そうなんだよ。あと、初発の時そんな話を聞いていけばもっと元気な精子を保存できたと思うんだけど、再発の時に初めてそういう話を聞いたんだ。今なら精子保存とか、女性だったら卵子凍結とか、いろいろなアドバイスがされるんじゃないかな。

▼高橋：私も卵子凍結の話はあったけど、「治療を早く」という思いで、そのことは全然考えなかった。その時はそれどころじゃなかったから。

「STAND UP!!」でも、このあたりの話は最近みんなでするようになったよね。

今回の座談会で感じたことや、がんと結婚について悩みを抱える方へ向けてアドバイスをお願いします。

▼高橋：がんになって初めて時間の大切さに気がついたかな。そこで恋愛や結婚に対する自分の考えが変わったよね。何に対しても諦めちゃいけないんだって。今の世の中、結婚できない人ってたくさんいるじゃん。だから、それは病気云々じゃなくって、自分の気持ち次第だと思う。

▼有川：僕の場合は結婚後の罹患だったから、熊耳さんが話してた「家族のフレーム」っていう考え方が心に残ったかな。がんになって改めて家族のことを考えるようになったし、支えてくれる周囲の人、特に奥さんに感謝するようになったから。前は本当に仕事人間で(笑)。

▼熊耳：アドバイスっていうか、俺の感覚として、がんのこと話してもわりと受け入れてくれると思う。友だちも含めているんならね。だから大丈夫なんじゃないかな。まずは言ってみる。伝えてみるのが大切だと思う。

▼垣田：僕は早期だったこともあって、なんとなくかなって……。

▼熊耳：なんとかなるかな……なんとかなるよ、ね。愛があれば(笑)

病気のことも含め理解してくれる相手がいるって素敵ですね。「そんな人が世界のどこかにいるんだ」と思っていると元気が出ました。今日はたくさん話しを聞かせてくれて、ありがとうございます。





同じ時間を過ごすなら、  
明るく楽しく笑っていよう

できないことの数  
数えるなんてナンセンス!

可能性を信じて、一歩ずつ

人生のスパイス

幸せだから笑うのではなく、  
笑うから幸せなんです

～1号から5号までの体験談より～

Photographer/小坂仁都美 ©STAND UP!! 無断転載・転売禁止

# 若年性がん患者団体 STAND UP!!

## 「STAND UP!!」とは…

「STAND UP!!」とは、35歳までにがんに罹患した若年性がん患者による、若年性がん患者のための団体です。私たちの活動目的は、現在闘病中の若年性がん患者が前向きに闘病生活を送れるようにすることです。そのために、2009年の立ち上げから現在まで、メンバーが自らの闘病経験を活かし活動してきました。主な活動内容は、フリーペーパーを通じた情報発信、メンバー間の交流、がん啓発イベントへの参加です。

これらの活動を通して若年性がん患者の輪が広がることで、一人でも多くの患者が孤独に闘病生活を送ることがないように願っています。

## 2014年度活動報告

毎月東京で運営会議を行っています。  
2014年度は、掲載以外の地域でも定期的に交流会がありました。

4月

- フリーペーパー5号発行
- ゴールドリボンウォーキング
- フリーペーパー5号お披露目会



5月



6月

7月

- STAND UP!! BBQ
- サポートメンバーとグッズ作成



8月

- いるか分教室夏季研修会登壇

9月

- リレー・フォー・ライフ 2014ちば
- サポートメンバー主催 チャリティイベント



10月



11月

- サポートメンバー主催 ハンドマッサージ講習会 名古屋交流会



- 総会

12月



1月

- 関西交流会

2月

- Forum for Japan Cancer Patients 2015 登壇

3月

- 名古屋交流会
- 埼玉交流会



## サポートメンバー募集

<http://standupdreams.com/>

「若年性がん患者ではないけれど、何かを手伝いたい!」という声を多くいただき、『STAND UP!!サポートメンバー制度』が誕生しました。若年性がん患者の家族から、がんとは関係のない方まで、さまざまな方が集まっています。年会費1,000円でサポートメンバーに登録していただいた方には、毎年発行のフリーペーパーをお送りします。そのほかにも「STAND UP!!」メンバーとの交流会のお知らせ、活動内容などのご報告メールも配信しています。詳しくは「STAND UP!!」ホームページをご覧ください。



代表  
松井 基浩

今年も無事、フリーペーパー6号を発行することが出来ました。「STAND UP!!」メンバーも300人を超え多くの方々に読んでいただけるようなフリーペーパーとなりました。ここまで継続してフリーペーパーを作成し続けられているのは、多くの皆さまの支えがあったからこそだと実感しております。「STAND UP!!」を支えてくださった多くの皆さま方にこの場をお借りしまして深く御礼申し上げます。今年も編集長を中心に「このフリーペーパーが、がんと闘う人たちの少しでも前を向く力になってほしい」という思いを大切に、フリーペーパー6号を作成しました。一頁一頁思いのこもったフリーペーパーが、一人でも多くの方に届き、そして力になることを願っております。



「STAND UP!!」  
第6号 編集長  
中陳 香織

おかげさまで、「STAND UP!!」第6号が完成しました。お世話になった皆さま、本当にありがとうございます。今回初めて編集長を務め、若年性がん患者の皆さんに「ひとりじゃない」ということを伝えたいと改めて考えました。いま会社や学校から孤立し、つらい思いをしている方も多くと思います。そんな皆さんに、「がん患者にだっていろいろな可能性がある」「共に生きている仲間こんなにも存在する」と伝え、少しでもつらい気持ちを和らげてほしい。そのような想いでこのフリーペーパーを作りました。

「がん患者には夢がある」そう掲げて「STAND UP!!」を立ち上げた当時思い描いていた夢を「STAND UP!!」が叶えてくれました。当時の夢は闘病経験を活かして少しでも誰かのためになること。「STAND UP!!」が必要とされていると知るたびに、感謝の気持ちでいっぱいになります。今の夢は、がんを経験して良かったとみんなが思える社会をつくること。長い道のりかもしれませんが、私は夢のある人生が大好きです。

副代表  
鈴木 美穂



おかげさまで団体設立から6年目を迎えました。闘病中の仲間やそのご家族、病院関係者やそのご友人にまで「STAND UP!!」が認知され、たくさんの方から応援メッセージをいただいております。皆さんからいただいたパワーを今後どのような活動につなげるかワクワクしています。これからも温かく見守っていただければ幸いです。

事務局長  
熊耳 宏介



つらいとき、苦しいとき、逃げ出したいとき……ふと周りを見渡すとたくさんの仲間に支えられていることに気が付きます。そしてフリーペーパーに携わるたびに人の優しさあたたかさに触れます。大丈夫、ひとりじゃないよ、共に支え合って生きていこう。このフリーペーパーを通してたくさんの人にメッセージが届きますように。

「STAND UP!!」  
第6号 副編集長  
水橋 朱音



## STAND UP!! メンバー募集

STAND UP!! ホームページ

<http://standupdreams.com/>

現在若年性がんと闘っている方、35歳以下の罹現在若年性がんと闘っている方、35歳以下の罹患で闘病経験のある方、一緒に繋がって交流しませんか？ 定期的に開催されているイベントやチャットを通してメンバーと交流を深めることができます。入会方法については、「STAND UP!!」ウェブサイトをご覧ください。ご意見、ご感想、お問い合わせもお待ちしております。



スマートフォンからはQRコードを読み込むと簡単にアクセスいただけます。

ご協賛いただきありがとうございました

●大原薬品工業株式会社 ●認定NPO法人ゴールドリボン・ネットワーク 松井秀文(五十音順 敬称略)

認定NPO法人

# ゴールドリボン・ネットワーク



## 小児がんの子どもたちのために

小児がん治療中の子どもたちのために、治療中にかかる病院への交通費助成や小児病棟の学習室の整備、またQOL（生活の質）向上のため、小児がん経験者奨学金制度、サマーキャンプやワークショップなど、多岐に渡る支援を行います。



## 小児がんの治癒率向上のために

小児がんで命を落とす子どもが少しでも少なくなるよう、また合併症で苦しむ子どもがひとりでも少なくなるように治療方法・薬の開発への支援を行っています。



## 小児がんをよりよく理解してもらうために

小児がん経験者やそのご家族のことを正しく理解してもらえよう、ゴールドリボン・ウォーキングなどのイベントの開催、後援を通じ、理解促進に取り組みます。

小児がん経験者やそのご家族のことを正しく理解してもらえよう、  
「ゴールドリボン・ウォーキング」などのイベントの開催、後援を通じ、  
理解促進に取り組みます。

認定NPO法人 **ゴールドリボン・ネットワーク**

〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-32-F E-mail: [npo@goldribbon.jp](mailto:npo@goldribbon.jp)

<http://www.goldribbon.jp>

もうひとつの我が家。

我が子ががんと闘っているのを見守る

親の気持ちと苦しみを見てきたから、

どうしても創りたかった。

アフラックペアレンツハウス浅草橋(東京)

小児がんなどと闘う子どもたちと、そのご家族を支えるために。  
アフラックは、アソシエイツ(販売代理店)や社員との寄付によって、  
日本初の総合支援センター「アフラック ペアレンツハウス」を  
設立、運営支援しています。

私たちにできる応援を。

アフラックペアレンツハウスに関する詳しい情報は、[www.aflacparentshouse.jp/](http://www.aflacparentshouse.jp/)まで。

「生きる」を創る。

**Aflac**

アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)

〒163-0456 東京都新宿区西新宿 2-1-1 新宿三井ビル

☎ 0120-5555-95 URL: <http://www.aflac.co.jp/>